

CONTENTS

02 特集 ひらめきが生まれる教室

02 子どもの思いを引き出し、広げる教師の支援【北澤俊之】

04 図画工作科における「ひらめき」を生み出す授業【齋藤彩乃】

06 デザインの授業から生まれる「ひらめき」【渡部功哉】

08 スズたんのかになる、みになる!

・「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」
すみだ北斎美術館【千葉椎奈】

10 ICT活用のタネ

・写真を撮る【田浦海太郎ジャン】

11 日常を見つめて

・「美術館」ある日の美術館での出来事【亀井章典】
・「中学校」形と色彩を心に蓄える時間【今崎晃庸】

12 題材アレンジレシピ

・「小学校」こすりだしからうまれた おしゃれな〇〇【杉山祥子】
・「中学校」自分を見つめてー15歳の自画像ー【佐藤裕理子】

16 先生のため

・「カラフルレインボー」【朝重久美子】



特集

ひらめき

が生まれる教室

子どもの思いを引き出し、広げる教師の支援



1 子どもの思いや 願いから始める

子ども達がアイデアをひらめく瞬間は、「こんなふうにしてみたい。」「もっと面白いものにと訪れます。そのために私達が心がけるべきことは何でしょう。例えばそれは、彼らが自ら選んだり決めたりする場を保障して励ますこと、あるいは他愛ないアイデアをみんなで和気あいあいと話したり、失敗を恐れずに思いついたことを試したりできるような柔らかな時間と空間を用意することなどでしょう。そうしたことを前提とし、ここでは授業の展開に沿いながら、子ども達の「ひらめき」を促す手立てについて考えていきたいと思っています。



2 ねらいをシンプルに 提示する

授業をしていると「何をつくったらいいのかわからない。」と言って活動に取りかれない子がいます。しかし、その子の話をよく聞いてみると、活動の目標がしっかりと捉えられていないケースがあります。アイデアを広げようにも、その目的がぼんやりとしていては無理ありません。そのため、導入時に授業のねらいをできるだけシンプルに提示することを心がけましょう。例えば、教科書を示しながら子ども達を活動に誘う時、「なるほ



ど、こういう作品をつくるのか。」と早とちりさせていないでしょうか。紙面に掲載された作品は、作者が試行錯誤のうちに課題解決した結果であって、題材のねらいではありません。私達は、それらの作品が生まれる契機となった題材のねらいを、できるだけシンプルに子ども達に提案する必要があります。

提案のわかりやすい例として、動くおもちゃのような機構工作の題材で考えてみましょう。導入時、つい工夫あふれるさまざまな作例を紹介したくなるかもしれません。しかし、装飾を一切取り払った仕組みを示すことから始めるのはどうでしょう。その面白い動きをみんなで見えて、何が見えるか想像するのです。

授業のねらいを端的に、しかも子ども達のチャレンジ精神をくすぐるように伝えることは容易ではありません。まさに指導者の教材研究にかかっています。し

かし、シンプルに提示するからこそ乗り越えるべき壁が明確に見えるし、自分だったらこんなふうに乗り越えてみたいという想像力やチャレンジ精神が喚起されるのです。



思考を広げて 可視化する

創造活動の中では、拡散思考と集中思考の二つの思考が働いているといわれます。主題に関するアイデアを数多く出すことで、固定概念から思考を解放しつつするのが拡散思考です。その拡散思考で出されたアイデアを整理し、関連づけ、一つの解決策を見いだすのが集中思考です。ところが子ども達は、この拡散思考に慣れていません。ごっこ遊びや替え歌、見立てなど、本来子ども達は想像力を働かせて異なるものをつないで遊ぶことが得意なはずなのですが、正しい規範や知識の獲得が求められるようになる学齢期を境に、その力は衰退していくといわれます。

図工・美術の授業でも、近年ではアイデアを練る際に、スケッチに加えてマインドマップのような思考ツールが活用されるようになりました。その主な役割は、先の二つの思考を無理なく促し、可視化することです。ただ、こうした手法は論理的思考がまだ十分に働かない年齢の低い子ども達には難しいかもしれません。その意味で、小学校の中学年ぐらいまではテーマに関わるアイデアをみんなで出し合い、そ

れを指導者が黒板に書き出してあげるとよいでしょう。拡散思考のプロセスを教師や友達の力を借りて行うことで、友達の多様な視点を得ることができ、それらを足がかりに自分らしいつなげ方や整理の仕方アイデアをまとめていけるはずです。

また、ものの操作はまさに具体物を通した思考の可視化といえることから、低学年に限らず、どの学年にも有効です。表現対象や材料と触れ合う時間をたっぷりと保障することで、言葉を介すのとはまた違う、身体を通したより直観的な思考が可能となります。



さらなるイメージを 触発させる

順調に滑り出したかに見えても、しばしば思わぬ壁にぶつかるのが図工・美術の授業です。そんな時こそ、貴重な学びのチャンスと捉えましょう。活動の途中でどう進めればいいのか迷っている子がいれば、これまでの取り組みを認めた上で、「ここには何があるのかな。」「これからどんなことが起こるんだろうね。」といったように、子ども達の新たな想像や連想を触発する声かけをするのも有効です。また、「その時、どんな気分だったの。」「触った感じはどうかな。」「あの時はどんな方法でつくったのかな。」など、主題に関わる生活経験や既習事項を想起させることで、身体と結びついたその子ならではのイメージが立ち上がるのが期待できます。



偶然を味方にする

計画通りにできなかったとがっかりする子を見かけます。事前の計画はもちろん大事ですが、本来、表現とははじめに立てた計画をそっくりなぞるような直線的な行為ではありません。何枚ものエスキースを準備して臨むアーティストでさえ、それを越える何かを期待します。たまたま出会った偶然のよさに気づいて、生かす力を身につければ、表現は格段に楽しくなります。「はじめの計画とは少し違っけど、意外といいかも。」と、その表現を採用できるのも一つの「ひらめき」といえるでしょう。そのような意味で、私達指導者も柔らかな姿勢で彼らの行為や作品に向き合うことが大切です。



おわりに

壁にぶつかった時こそ、学びのチャンスだと考えています。私達指導者は、子どもが本来もつ力を掘り起こし、自力解決を促すことこそ腕の見せどころだと心得ましょう。そのためには、彼らの活動の様子に注意深くアンテナを張り、彼らの思いやこだわりを丁寧に見取っていく姿勢が大切です。そして何よりも、日頃から必要以上に結果にこだわらず、挑戦したり試行錯誤したりすることを尊重する教室文化の構築に努めることが重要だと考えます。

東洋大学
教授

きたさわとしゆき

北澤 俊之



1960年生まれ。東京学芸大学大学院修士課程美術教育専攻、武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程修了。東京都公立小学校、国立大学附属小学校等を経て現職。長年、図画工作教科書編集に携わり、特に鑑賞や総合的な図画工作科の活動分野に造詣が深く、造形的な見方・考え方や発想法を習得する短時間題材の開発にも意欲的に取り組んでいる。日本美術教育連合、美術科教育学会、造形教育センター所属。著書：「日常をとらえ直すための子ども達の造形教育プログラムの構想―ユーマを基盤として」（ナカニヤ出版）、「つくって学ぶ―子どもと教師で立ち上げる造形教育」（開隆堂）、「よくわかる図画工作科のしくみ」（共著・開隆堂）、「よくわかる図画工作科『評価』のしかた」（共著・開隆堂）、「図工の授業をデザインする」（共著・東洋館出版）ほか。論文、寄稿文多数。



図画工作科における

ひらめき

を生み出す授業

〔はじめに〕

豊かな創造性を備え、持続可能な社会のつくり手を担う児童を育成するためには、個別最適な学びと協働的な学びを実現し、主体的・対話的で深い学びに向けた授業展開が必要です。創造活動を通して、つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、豊かな情操を培うことを目標としている図工だからこそ身につけられる資質・能力があります。

今回、図工における「ひらめき」をテーマに、三つの授業実践を紹介します。

〔児童理解に基づく 学びをゆだねる 教師の調整力〕

図工の授業では、児童の思いを受け取る教師の調整力が最も重要であると考えます。次の二つの調整力が児童の「ひらめき」を生み出す材料になります。

- ① 教師が児童の表情やつばやきをキャッチしながら、活動に興味づけ・価値づけをしていくこと。
- ② ひとりひとりの活動に応じて、適切なタイミングで的確な働きかけをしていくこと。

ある日、図工の授業で、こんなことがありました。児童がほぼ描き終えた自分の作品を目の前に悩んでいました。私はすぐに声をかけようとしたが、思い直してしばらく様子を見てみることにしました。児童は、自分の作品をさまざまな方向から見たり、友達の作品をのぞいたりしながら悩んでいます。すると、おもむろにオレンジ色と黄色のクレヨンを取り出し、ほんの少しだけ色をつけ足していききました。そのあと、「先生、終わりました！」と満面の笑みで作品を見せにきました。その表情には満足感が表れていて、輝いて見えました。「さっきは悩んでいたよう

に見えたけど、どこを変えたの？」と聞いてみると、「ちょっと何か足りないなあと思ったの。よく見たら、光の感じがなかったから、オレンジ色と黄色を足してみたんだ！題名も光ってる感じにするんだ！これまで一番お気に入りの作品になったよ。」と夢中で語ってくれました。



このように教師が調整力を発揮し、児童に学びをゆだねたことが「ひらめき」を生むきっかけとなりました。

〔場の設定の工夫〕

図工の授業において、教師がこだわって考えなければならないことの二つとして「場の設定」が挙げられます。こちらについては、造形遊びの授業を通して考えていきたいと思います。

造形遊びで児童は、心と体を一つにし



ながら、材料や場所、空間などの特徴から造形的な活動を思いつき、多様な試みを繰り返しながら学ぶことができます。「つくり↓つくりかえ↓つくる」という児童の姿がたくさん見られる中で、鑑賞の時間を教師のタイミングで設定するのではなく、児童が活動の中で自然と鑑賞できるように「ながら鑑賞」「ながら鑑賞」ができる場の設定をしています。

材料を取りにいきながら、友達と交流するながれで鑑賞できるように、「材料をどこにどのようにつくのか。」を考えています。教室の中央や、児童が活動する場所を囲むように置くなど、児童の導線をイメージしながら考えます。また、机の配置も工夫することで、互いの作品や活動の様子が見やすくなります。

場の設定を工夫することにより、教師の意図やタイミングで鑑賞を行わなくても、自然と児童同士が鑑賞し合うようになり、能動的に会話が生まれることで「ひらめき」を生み出している姿をたくさん見ることができました。これは造形遊びだけでなく、絵や立体、工作などの活動でも大切にしたいものです。

〔思考を刺激する アートカードの実践〕

児童の思考を刺激することは、見方や考え方を働かせるきっかけになります。



す。これは、図工以外の教科にもいえる大切なことです。

アートカードは、造形活動において形や色、イメージなどといった重要な要素を学ぶことのできる大変有効な鑑賞教材です。アートカードを活用することで、児童が楽しみながら、作品をじっくり見ること、形や色を捉えること、イメージをもつことができます。作品の中に入り込んで、描かれていない世界や物語まで感じたり考えたりする姿も見られます。このように促すためには、アートカードの作品と児童をどのように出会わせるかが重要です。

私は「しんけい絵すいじゃくをしよう！」「〇〇にプレゼントするなら？」「アートカルタをつくろう！」などの活動を通して児童のわくわく感を引き出し、自ら考えたくなる活動を取り入れています。活動をする中で「わあ、すごい！」「なるほど！」「わたしはね...」「これってもしかして...」などといった児童の声が教室に溢れました。児童はアートカードから感じ取ったことを伝え合うことで「ひらめき」が生まれ、思考が刺激されながら、造形的な見方や考え方を深めていくことができます。

アートカードを使った活動は、自然と笑顔や対話が生まれやすく、相互理解にもつながるので、学級開きで活用することも効果的です。また、授業参観などで保護者に参加してもらつことも思考を刺激することになり、児童の新たな「ひらめき」や学びのきっかけとなります。

これからも、児童ファーストで授業を展開し、児童が自分のよさや可能性をしっかりと捉え、児童達が「ひらめき」輝く姿を追い求めていきたいと思います。

埼玉県朝霞市立
朝霞第五小学校
教諭
さいとう あやの

齋藤 彩乃 先生





デザインの授業から生まれる



〔はじめに〕

私は中学1年生の最初の美術の授業で「もし美術がなかったらどうなるだろうか。」という話をします。あらゆるものがデザインされている世の中で、美術がなければ、すべてのものが同じ形や色彩になる可能性があると考えています。普段使っているペンケースや衣類、家具や建物などさまざまなものが味気なく感じるのはないでしょうか。

美術があるからこそ、心惹かれた商品を手にした時のうれしい気持ちや、落ち着いた照明や色彩が施された場所で感じられる穏やかな気持ちなど、生活の中で豊かな感情が得られるようになります。美しいものを見る中で育まれる感性は、「なぜ美しいと感じるのか。」という疑問が生まれ、そのことが日常の「気づき」や「ひらめき」につながるように思うのです。ですから、意識してみると美術は日常生活に溶け込んでいて、人々が快適に、豊かに生活するた

めに、なくてはならない大切なものであるということを生徒達に伝えていきます。

今回、中学校美術の授業における「ひらめき」について、デザインの授業を通して考えていきたいと思います。私の実践する授業「形と色彩の味覚表現」や「紙パック飲料のパッケージデザイン」などに触れながら、デザインを考える上で、生徒達の「ひらめき」を発現させるために、どのような問いかけや授業の工夫をしているかをお伝えします。また、デザインの授業だけではなく、普段から授業の中で行っている活動も紹介します。

〔感覚を視覚的に共有する〕

私がここ数年続けている「形と色彩を使った味覚を表現する」授業では「甘い」「辛い」「酸っぱい」「苦い」の4種類の味を、形と色彩で表現します。表現する前にまず、生徒達ひとりひとりがその味覚に対してどのような印象を

もっているか、折り紙を使って味覚を共有する活動をしています。

例えば、「甘い」であれば「生クリーム」の色としての「白色」を選択する生徒や、「甘さ」「幸せ」というイメージから連想し、感覚的に好きな色であるピンク色を選択する生徒もいます。それぞれが選択した色彩と理由を共有することで、生徒達は「こんな考え方もあるのか。」と友達の考えに触れ、人によって色彩の捉え方が違うという気づきから、後の表現活動での発想の広がりにつながると考えています。

〔シチュエーションの設定〕

生徒達にシチュエーション

に没頭させる「紙バック

飲料のパッケージデ

ザイン」の授業では、

導入部で、生徒達に

デザイナーになりき

て制作を行うこと

を伝えます。例

えば「皆さん

は〇〇ビバ

レッジとい

う飲料メー

カーから依

頼を受けたデ

ザイナーです。」

というように伝える

のです。すると、生徒達は自分がデザイナーだとしたら、何を考えてつくるかを模索し始めます。

タブレット端末を使用し、既存のパッケージデザインにはどのようなデザインや商品があるのかを調べ、そこから「どのような味にするのか。」「どのような層をターゲットにするのか。」「どのような形や色彩を使うべきか。」「商品の棚に陳列された時にどのように見えるか。」と発想を広げていくのです。

そうして、もし自分がデザイナーであったならと考えていくことで、ただ好きなものをつくるのではなく、明確な意

図をもったデザインへ昇華できるのではないかと考えています。

〔交流の場の設定〕

生徒達が「ひらめき」を

得るきっかけをつくるため、前述した授業に限らず、制作途中にほぼ毎時間、数分程度の交流する場面を

設けています。制作の途中で、行き詰まる生徒は必ず出てきます。教師側からの支援のほかに有効なのは、友達の制作風景を見たり、悩みを共有しアドバイスを伝え合ったり、やってみようまくいった部分や失敗した部分を共有したりして交流することです。自分にはない発想に触れる機会は、生徒達の発想を柔軟にし、互いが気軽に交流し合えるよりよい制作環境をつくるきっかけになると考えています。

〔おわりに〕

生徒達の「ひらめき」は生活の中のデザインを含め、友達の感覚に触れながら、多角的に物事を見つめる際に生まれるものであると考えています。そのため、生徒達の交流の中で、友達の制作工程や考え方に触れる機会を与えたり、自分自身が何気なく普段触れて



いるデザインに焦点を当てたりすることを大切にしています。

美術の授業を通じて、生徒達が先人のつくり上げてきた作品や他者の考えに触れ、「ひらめき」を得ることで、新たな発想やデザインを創造する未来で活躍することを願っています。

北海道札幌市立
厚別南中学校
教諭
わたなべ こうや
渡部 功哉 先生





今回は
すみだ北斎美術館の
学芸員
千葉椎奈さん
にお話を聞きます！

造形ジャーナルの
新しいキャラクター、ズビたん。
絵を描くことやモノづくりが大好きで、
最近は、美術作品を見ることに夢中！
ズビたんと一緒に
学芸員の方にお話を聞いて、
作品の深い魅力を
発見していきましょう。



さらに深く知ることができる
「ズビたんのもっときになる！」は ▶
こちらから！



富嶽三十六景 神奈川沖浪裏 [多版多色木版／24.6×36.5cm] 1830～33年頃

葛飾北斎 [1760～1849] すみだ北斎美術館蔵 [東京都]

さまざまな名所からの富士山の姿を描いたシリーズである「富嶽三十六景」の一作で、
海外では「The Great Wave」の名で親しまれている。



浮世絵版画の制作の流れ

浮世絵版画は、版元の企画に沿って、
絵師・彫師・摺師の順で制作が進められます。

作品を
紹介してくれた
美術館



すみだ北斎美術館

〒130-0014 東京都墨田区亀沢2-7-2 TEL：03-6658-8936

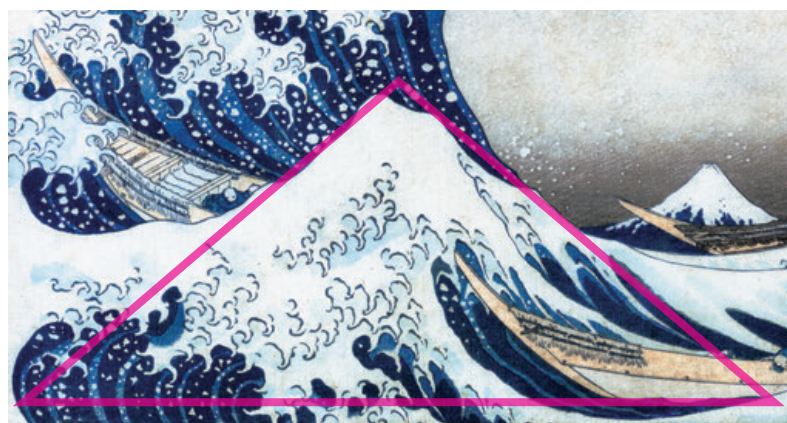
開館時間：9:30～17:30(入場は17:00まで)

休館日：月曜日(ただし、月曜日が祝日や振替休日の場合は開館し、
翌平日休館)、年末年始など

とても迫力のある大波ですね！
北斎は実際に
見て描いたんですか？



千葉 大波を実際に見て描いたという記録は残っていませんが、北斎は見たものにユーモアや独自の表現を含めて作品づくりをする特徴があります。本作品では、波の大胆な動きを表すために独自の表現がされていると考えられます。一方で、作品の手前に見られる峰の尖った三角の波は、実際に神奈川県の沖合



で見られる波でもあり、事実とユーモアがうまく取り入れられているんです。

荒波の中にいる舟に乗った人々にも何か意図が含まれているのですか？



千葉 よく見ると、人々は舟にしがみつくような姿で描かれていますよね。大波に翻弄される人間に対して、遠方の富士山はいつもと変わらずに鎮座しています。この対比があることで、動と静が際立ち、波や動き、自然の力強さを引き立てていると考えられます。

この作品の波にはきれいな藍色が使われていますね。
北斎は色に対して何かこだわりがあったのですか？



千葉 北斎の色に対するこだわりはまさにその藍色に見られます。本作品の藍色は、ベロ藍（フルシアンブルー）と本藍を使い分けているんですよ。それぞれ性質が異なり、ベロ藍は水に溶けやすくぼかし摺りに適しているため、空や水の表現に使用されています。そして、輪郭線には本藍が使われているといわれています。

北斎は色にこだわりをもっていました。が、実は摺りが繰り返される中で、版元や摺師の考えによって他の色に変

えられることもあったんですよ。

北斎の意図しない色で表現されることもあったなんて驚きました！
それに北斎自身が摺るわけではないんですね。



千葉 浮世絵版画は分業制で制作され、絵師は最初の摺りの時のみ立ち会います。それ以降は、絵師である北斎が意図しない色を加えられることもありました。

北斎は、当時どのくらい人気だったのですか？



千葉 北斎は当時から大変人気の絵師でした。門人は200人以上いたといわれており、絵を多くの人に学んでほしいという北斎の思いから「北斎漫画はくさいまんが」という書物が出版されました。また、北斎は読本（小説の一種）の挿絵も手掛け、そこでも人気を得ていました。幅広い人々にとって親しみやすいものに携わっていたことが人気の理由であると考えられます。

「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」を鑑賞するときの、注目ポイントはありますか？



千葉 この作品の大波にはまだまだ注

目ポイントがあります。立ち上がった波の上部が白く描かれており、まるで富士山のような描き方が意識されていることに気づきます。さらに、大波が落ちる先に富士山が描かれており、見る人の視線をひきつける工夫が見られます。「富嶽三十六景」の他の作品でも視線を誘導する描き方に注目すると、面白い発見がありますよ。

最後になりますが、千葉さんにとつての北斎の魅力を教えてください。



千葉 北斎の作品には、計算された構図に加えて、ユーモアにあふれた作品が多くあります。さまざまな流派や学問を学び、確かな画力をもっていました。が、そこに庶民が親しみやすいユーモアを取り入れて、画面を構成することができるそんな北斎の多才さが魅力だと感じています。

千葉さん、ありがとうございました！



今回の作品は
図画工作5・6年
24ページに
掲載！





今回のテーマ

「写真を撮る」



「手のひらで粘土をはさんでたたいていたら、いい形になりました。」

開隆堂出版「図画工作3・4下」に「お気に入りの形」という粘土の題材があります。この題材では、つくりたい形をあらかじめ決めるのではなく、粘土を握ったりつまんだりしながら、「あっ！いい形になった！」という発見の繰り返しを楽しむことがねらいになっています。

活動の中で、「お気に入りの形を見つけたときにタブレット端末で写真を撮ろう。」と、子ども達に伝えています。この「写真を撮る」という行為がとても大切です。はじめから、写真を撮るということをふまえて活動に取り組むことで、子ども達は「いい形」を見つけようと意識します。

例えば、粘土を握っていく中で高く積み上がり絶妙なバランスになった時、あるいは粘土全体が指の跡でこぼこになった時、「これが私のいい形だ！」と自分自身で決めて写真を撮ります。その後、また新

たな「いい形」を求めて粘土と向き合います。写真を撮る活動がないと、ただ粘土を触り続ける時間になってしまったり、授業の終わりに残っていた形がお気に入りの形ということになってしまったりするかもしれません。

私はこの活動の中で、タブレット端末が「自己決定」を促す道具になっていると感じています。ある児童は、2時間の中で10回も写真を撮りました。別の児童は、「ああかな、こうかな。」といろいろな形を探しながら、1回だけ写真を撮っていました。「いい形」だと写真を撮っては何度も新たな形をつくる。まだ「いい形」ではないと何度もつくり変える。どちらも「自分で決める」姿です。このように、2時間の中でもさまざまな自己決定の瞬間が訪れます。

図画工作では、材料や色を選ぶなど、

さまざまな場面で自己決定の機会があります。「写真を撮る」という行為を通して自己決定をし、自分が感じる「よさ」や「お気に入り」に気づいていくことは、ICT機器の有効的な活用の一つになるのではないのでしょうか。



東京都町田市立南大谷小学校
主任教諭
たうらかいたろう
田浦海太郎ジャン

日常を見つめて

— アートの視点で —



耳を押さえて作品を熱心に鑑賞している。

ある日の 美術館での出来事



群馬県立館林美術館
副主幹
かめいあきひさ
亀井章央

美術館に来た小学生が、フランクソワ・ボンポンの「雉鳩」をじっと見ていた。私は少しの時間をおいてから、声かけをした。「君はこの作品を見て、どんなことに気づいた？」

「うーん。なんかくちばしがかわいい。」「そうか。なんでそう思ったの？」

「くちばしが体に埋もれているところがかわいいから。」「なるほど。君は雉鳩の仕草をよく見ていたんだね。」

私は、美術館に来た子ども達と対話する中で、子ども達なりの感じ方を拾い上げて、それを言語化して返してあげたいと考えている。

この日、子ども達が帰った後、学芸室に戻り、記録用に撮った写真を見て、はつとした。そのときは見逃してしまっていたが、この子は手で片方の耳を押さえていた。もしかしたら、作品から音を聴いていたのか。それとも周囲の音が嫌だったのか。理由はいくつも考えられる。もつとよく子どもの姿を見ていたら、別の声かけができたのかもしれない。

現在は美術館に向中だが、これまでの教員生活でも、指導案通りの整理された授業をしようという意気込みをもち、こちらのねらいに近づけようと子ども達に対して誘導的な声かけや支援を行ってしまっていたことがあった。

声かけは非常に難しい。質問攻めにした、り、むやみに声をかけたりしていいものでもない。その前提にある教師の「見方」が非常に大切であると考えてる。声かけの大切さを再認識した、ある日の美術館での出来事だった。

形と色彩を 心に蓄える時間



熊本県水俣市立
水俣第一中学校
教頭
いまさきこうよう
今崎晃庸

毎年6月頃になると年度始めの慌ただしさが一段落する。周囲の景色も目の覚めるような新緑から、梅雨空のもとくすんだ色合いになるが、色づき始めたアジサイの華やかながらも落ち着いた色調が、心に安らぎを与えてくれる。そして授業では二つ目の作品が完成する頃になり、表現活動が軌道に乗って動き出したことを実感する頃でもある。

さて、子ども達にとって美術の授業とはどのような時間であるべきだろうか。私は最近、「心の中に形と色彩を蓄えるための時間」ではないかと考えている。授業では、自然や先人達の表現など、さまざまな形と色彩に触れる。そして、そこから感じたことをもとに描いたり、つくったりして体感しながら、表現や鑑賞の活動を通して、形や色彩が心の中に蓄えられていくと考えている。心の中に蓄えられた形や色彩が多ければ多いほど、将来美術に直接関わることはなくとも、ものの見方や考え方を広げ、人生を豊かにしてくれるものになると私は信じている。

そのため、指導者は題材を設定する際、どのような形や色彩に触れさせ、

どのような表現力を身につけさせたいのかを明確にもちつつ、子ども達の表現に対して柔軟に対応しながら指導をしていく力が求められるのではないだろうか。

学校現場では忙しい日々が続くが、私自身は「美」に対するアンテナを常に高く張り、身近にあるささやかな「美」を拾い上げ、授業や学校生活での話題に織り交ぜながら、少しでも多く子ども達の心に形と色彩を蓄えさせることができればと願っている。



ある日の授業での一コマ。

学年 第1学年

時間数 7時間

身のまわりにある模様の形や色に気づき、それをもとに工夫して表す

こすりだしから うまれた おしゃれな〇〇

静岡県藤枝市立
大洲小学校
すぎやま さちこ
杉山 様子



●令和6年度版 開隆堂出版「ずがこうさく1・2上」32・33ページ
「こすりだしから うまれたよ」をアレンジ



題材のねらい

クレヨンで身のまわりの凹凸をこすりだすことで生まれる模様の形や色の面白さに気づき、その形や色をもとに表現したいことを見つけて工夫して表す。

主な材料・用具

クレヨン(巻紙はとる)
コピー用紙(B5) 色画用紙
はさみのり ファイル

学習の流れと 子どもの活動

①鑑賞しよう…教師が用意した、たくさん模様の色が並んでいる写真を鑑賞する。

②おしゃれな模様を集めよう…さまざまな場所での凹凸を探し、こすりだしをする。

③何に見えるかな…こすりだしをしてできた模様を鑑賞する。

④おしゃれな〇〇を生み出そう…こすりだしたのから思い付いたものを、はさみで切り、画用紙に貼って表す。



こすりだしから うまれた おしゃれな おみせやさん

出方に違いがあることに気づき、クレヨンを紙に当てる角度や力加減を調整するようになりました。見つけた凹凸を自分の選んだ色でこすりだし、作品をファイルにため、互いに模様を見つけた場所を紹介し合います。こすりだしの面白さに気づいた子ども達は、あらゆるものがこすりだしの対象に見え、挑戦したいという思いに駆り立てられたようです。後日、家の畳や壁、靴などで試したも

■身のまわりにある模様の形や色に気づく

本題材は、たくさんさんの模様や色の生地が並んでいるお店や、生地の見本帳の写真を鑑賞することから始めました。こすりだしという技法に限らず、身のまわりには数えきれないほどの模様や色が存在し、その影響を受けたり、それらを自ら選択したりしながら生活していることを、本題材を通して子ども達に実感してほしいと願い、実践を行いました。

さまざまな色を使ってこすりだした模様を子ども達に見せると、「ど

こにそんな模様があったの?」「どうやって集めたの?」と疑問を口にしました。実際にこすりだしをやってみせると、すぐに身のまわりのものに目を向け、提示した模様が何の凹凸のかを予想し始めた子ども達は、自分でもやってみたいという思いを高めていきました。

■こすりだしの技法を味わう

子ども達全員が、こすりだしという技法の特性を理解して表現活動に取り組むことができるように、描画材料は細かい凹凸も写すことができるクレヨンに限定しました。子どもは、自分の模様と友達の模様を比べ、模様の

のを持つてくる子どももいました。このように、こすりだしという技法や集めた模様が、学びを進めていくうちに子どもの中で大切なものになっていくことが伝わってきました。

■さまざまな見方を共有し、視点を広げる

一人一人が集めてきた模様をみんなで鑑賞すると、同じ凹凸からこすりだした模様を見ても、人によって「ハチの巣」に見えたり、「氷」に見えたりするなど、さまざまな見え方があることに気づきました。その後、模様を何かに見立てて「こすりだしから生まれたおしゃれな〇〇」をつくり出そうと想像を膨らませていきました。自分が集めた模様を並べ、見直すことで「かき氷屋さん」「ひらひら帽子屋さん」「こすりだし超高層タワー」など、自分の主題を明確にし、はさみで切り、画用紙に貼っていました。子ども達は主題をもとに、自分が思い描いたストーリーを語りだしていきます。作品を見た子ども達は、作者の意図に共感することもあり、違ふ印象を受けることもあり、自らの考えを伝え合っていました。互いに表現と鑑賞を繰り返す中で、自分の考えとは違ふ価値が作品に加わり、見方や感じ方が広がって

く様子が見られました。

こうして子ども達の造形的な視点は、新たな活動を積み重ねる度に磨かれ、自分を取り巻く世界がすてきな形や色などで溢れていることに気づき、どんどん見える世界が変わっていくのだからと感じました。

題材の観点別評価規準

主	思	知
主 クレヨンで凹凸をこすりだしたり、見えてきた形や色から表現したいものを見つけて学習活動にたのしく取り組もうとしている。	思 鑑賞 自分や友達の作品を鑑賞することを通して、表現したいことや表現方法などについて考えるなどとして、自分の見方や感じ方を広げている。 発想・構想 こすりだしをする活動を通して、見えてきた形や色から表現したいものや表現したいことを見つけて、どのように表すか考えている。	知 知識 凹凸をこすりだす活動を通して、クレヨンで表される模様の形や色などに気づいている。 技能 クレヨンやはさみの扱いに慣れ、こすりだしたものから思いついたことを工夫して表している。

ふり返り

- こすりだしが楽しくて、家でもやってみたよ。量でこすった模様、みんなに見てほしいな。
- 給食のワゴンの模様もこすりだしたら面白そう!こすりだしてみたいものがたくさんあるよ。
- みんなのおしゃれな〇〇、全部がすごいね!



知 知識・技能 思 思考・判断・表現 主 主体的に学習に取り組む態度

学年 第3学年

時間数 12時間

今しかない姿を夢中になって描く

自分を見つめて —15歳の自画像—

秋田県羽後町立
羽後中学校
さとう ゆりこ
佐藤 裕理子



●令和7年度版 開隆堂出版「美術 2・3」14～17ページ
「自分と向き合う ～自画像を描く～」をアレンジ



題材のねらい

自分の表情や内面を見つめながら、表し方を試行錯誤し、自分を表現する。

主な材料・用具

画用紙 鉛筆 色鉛筆
アクリル絵の具
水彩絵の具
クレヨン パステル など

学習の流れと 子どもの活動

- ①さまざまな画家が描いた自画像を鑑賞する。
- ②自分の顔を見つめて、パーツごとに描いたり、全体のバランスを見たりしながら、原寸大で表現する。
- ③グループや全体で互いの自画像を鑑賞し合い、よりよい表現にするためにアドバイスし合う。
- ④「自分」を表すために、背景にどのような要素が必要か考え、制作する。
- ⑤作品の解説文をまとめ、完成した作品を鑑賞し合う。



■今の自分を描く

中学3年生の今しか描けない、生徒それぞれの「自分」があります。それを大切にしたいという願いをもって自画像の制作に取り組んでいます。制作期間中も生

徒の内面は目まぐるしく変わっていきます。しかし、それもまた自分であり、どの自分も大切にしてほしいと、一人一人と対話しながら作品をまとめあげていく時間はとても楽しいものです。

■どのように自分を描くか

「自画像」との出会いの場面では、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ムンク、クールベ、ゴッホ、クリムト、岸田劉生などの自画像を鑑賞しました。それぞれに作者の思いがあり、表現したい自分があり、そのため技法もさまざまであるということを確認しました。自画像の授業では実際の姿と似ているかどうか、重要なのではなく、自分の内面をどのように描くかが大切であると、生徒に伝えていきます。中には絵を描くことが苦手な生徒もいますが、最初から写真を撮ることはせずに、鏡で見たり、友達と顔を見合ったりして、自由に話しながら和気あいあいと描いていました。背景については、これまで学んできた表現を思い出し、それらを生かすように伝えただけは、生徒に委ねました。将来の自分を描きたい生徒、これまでの思い出を描きたい生徒、好きなものに埋め尽くされたい生徒、抽象的な表現で自分の内面を表したい生徒な



自分なりの背景を描く様子

ど、誰一人同じような表現をした生徒はいませんでした。夢中になつて「自分」を表していることが伝わってきました。

■自画像の制作で伝えたい思い

本来、人は自分で何かを生み出すことを楽しいと感じるものだと思います。そのため、教師の役割は、安心して思いっきりその活動に没頭できる場をつくり出すことだと考えています。

今回の自画像の制作では、自分の内面を見つめる中で、今の自分が表現したいものを見つけ、表現する楽しさを味わえたのではないかと感じています。この経験を通して、何かを生み出すことは面白くてすてきなことだと感じてほしいと思います。

題材の観点別評価規準

主		思		知	
鑑賞	表現	鑑賞	構想・発想	技能	知識
さまざまな自画像の鑑賞を楽しみ、表現の意図や工夫などについて考える活動に主体的に取り組むとしている。	美術の学習活動を楽しみ、粘り強く考え、「自分」を表す活動に主体的に取り組むとしている。	さまざまな自画像から、作者の思いや表したいことを感じ取り、表現の意図や工夫などについて考え、見方や感じ方を深めている。	自分の内面や伝えたいことから主題を生み出し、形や色彩などの表現の構想を練っている。	制作意図に応じて描画材料を選択したり、表し方を工夫したりして、見通しをもって制作している。	形や色彩が感情にもたらす効果などをもとに、「自分」の姿や思いをイメージでとらえることを理解している。

ふり返り

- 自画像は難しかったけれど、背景を自分の好きなように自由に描くことができて、とても楽しかったです！
- いろいろなことに染まりやすい自分の性格を、グラデーションで表しました。
- 友だちに相談しながら、背景を完成させることができました、とても嬉しかったです。



知 知識・技能 思 思考・判断・表現 主 主体的に学習に取り組む態度



最初に左から紺色でぐねぐねとした線を描き、
いろいろな色の線をどんどん増やしていきました。
線を縦に描いたのは、いろいろな色の線を
たくさん描きたかったからです。



カラフルレインボー [画用紙、絵の具／38×54cm]
3年 塩尻嶺桜

先生のめ

この作品は、3年生になって初めて個人用絵の具を使って描く絵の題材「絵の具と水のハーモニー」の作品です。

授業では、まず「絵の具に混ぜる水の量を、自分で調節しながら描こう。」と呼びかけて始めました。最初に使いたい色を1色選びます。水を「少なめ」「中くらい」「多め」に溶いた絵の具で線を1本ずつ描きました。子ども達は絵の具を水で溶いて使うことは知っていましたが、水の量を変えただけでこんなに色が変えることにとても驚いていました。その後、好きな色を使って、水の量を意識しながら自由に描いていきました。

塩尻さんは、最初の授業で作品の左側のぐねぐねとした3本の線を描きました。次の授業では、水の量を変えて、さまざまな色づくりを楽しみながら次々にたくさんの線を描いていきました。

たくさん色で埋まってく画面に、友達から「すごくきれいだね。」と声を掛けられ、塩尻さんはうれしそうにニコリしていました。

(文)東京都葛飾区立川端小学校 主任教諭 朝重 久美子

開隆堂出版
LINE公式アカウント



図工・美術の授業に役立つ実践事例などの
最新情報をお届けします！

図工・美術

@741etmvy



No.448 / 2025

2025年10月8日発行

非売品

発行所 開隆堂出版株式会社
〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1
電話:03-5684-6121(営業)
03-5684-6118(販売)
03-5684-6117(編集)
編集兼発行人 岩塚太郎
印刷所 株式会社大熊整美堂
本文・表紙デザイン
有限会社アーバングラフィックス
イラスト ながのみ



開隆堂出版株式会社

<https://www.kairyudo.co.jp>

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1
北海道支社 〒060-0042 札幌市中央区大通西11丁目4番地21 52山京ビル7階
東北支社 〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡3-10-7 サンライン第66ビル5階
名古屋支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1丁目15番18号 オフィスサンナゴヤ9階
大阪支社 〒550-0013 大阪市西区新町2-10-16
九州支社 〒810-0075 福岡市中央区港2丁目1番5号 FYCビル3階

TEL:03-5684-6111
TEL:011-231-0403
TEL:022-742-1213
TEL:052-908-5190
TEL:06-6531-5782
TEL:092-733-0174